

「不器用」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「不器用の・・・一心に・・・勝る・・・名人なし！」～

鶺（いかるが）工舎、小川三夫さん。（高校の修学旅行で法隆寺五重塔を見たことがきっかけとなり、卒業後法隆寺宮大工の西岡常一の門を叩くが断られる。仏壇屋などで修行をした後に、22歳で西岡棟梁の唯一の内弟子となる。生前西岡は小川を評して「たった一人の弟子であるけれども、私の魂を受け継いでくれると思います。」と述べている）1997年徒弟制を基礎とした寺社建築専門の建設会社である「鶺工舎」を設立され、弟子の育成とともに、全国各地の寺院の改修、再建、新築等にあてられます。



私は今、徒弟制度による寺社建築会社「鶺工舎」で30人の若者と暮らしていますが、初めてここに来た子ができることといたら、飯炊きと工場の掃除くらいです。そして、何か月もの間、先輩たちが鉋で柱を削っているのを見て、「ああ、自分もあんな風に削りたい、削りたいと思う。そして本当に削りたくて堪らなくなった頃を見計らって、「削ってみい。」と鉋を貸してやるんですよ。そこまで待たなくちゃダメなんです。

その時に、こっちは自分の持っている一番いい鉋を貸してやるんです。そうすると、削る。削る。柱が薄い板になってしまうくらいに、うれしがつて削ります。その夜から、人が変わったように刃物研ぎを始めますよ。

はじめから全部教えても削れるもんじゃないんです。そうすると削れないことが重荷になって、辛くてしょうがない。本人が削りたいと思うところまで待ってやる。その我慢比べが大変なんです。

そして、5・6年たったところに、「こんなやり方もあるんと違うか」くらいの言葉をかけるとその一言が10にも100にもなって成長する。そこからは一気にですよ。

器用な子は早く上達する。でもすぐに慢心して落ちこちたり、また上がったりで波を打ってばかりです。不器用な子は初めはなかなか芽が出なくても、何かを機にコツを掴んだときは、そこからクッククツと伸びるね。

器用な子はその器用さに溺れる。何でもすぐに分かった気になるから、考えが浅い。

普通であればそれでいいのかもしれない。しかし、大きな重い仕事を背負わされた時につぶれちゃうんです。



器用、不器用といっても10年の修行をやるのであればそんなに大差ありません。

でも、器用な子はそこまでいられない。そういうことが多いですね。

西岡常一棟梁も「不器用の一心に勝る名人なし」と言っていました。

「1日1話読めば心が熱くなる365人の生き方の教科書」（致知出版社）

近年、企業などでは「即戦力」を求める傾向が強いようですが、それは企業がステークホルダーの要求に応えようと、短期的な利益ばかりを求め、企業としての社会貢献や長期的成長・目標を見失っていつつあるからではないでしょうか。

さあ！「今の自分」だけで・・・「これからの自分の評価」を決めず・・・コツコツと・・・
「本当の自分になりたい姿」をイメージして歩み続けたいものですね。